

〔第30回学術集会 シンポジウムⅠ〕

家族内の関係性をめぐる研究方法を探る

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野

(座長) 池田 真理

シンポジウムⅠでは、第30回学術集会のテーマの一つである、Dyadic approachによる具体的な研究について参加者の方々と一緒に考えるセッションにしたいと思い、企画を始めました。Dyadicとは「一対の」といった意味で、家族看護学においてDyadic approachと言う場合には、「夫婦」や「親子（父子・母子）」といった一対の家族員（家族サブシステムの最小単位）に焦点を当てるアプローチのことを指します。

ではなぜ、一人ではなく一対（二人）からのデータが必要なのでしょう。家族の現象は複数の視点で違う角度からとらえた方が真の姿がみえる可能性がある、だからDyadic approachなのです。自分の経験からもデータ収集の間に、同じ家族の中の二人から得られたデータのズレを見て家族のリアルな状況を把握できたことがあり、家族という単位は不思議だなど、その奥行きを感じたことがありました。

このシンポジウムに参加される方にも様々な家族との出会いがあると思います。そうした家族を思い浮かべながら、ご一緒していただきたいと思います。自分の明らかにしたい家族の現象について、研究の計画段階での目的を明確にし、また、得られたDyadicデータの分析を工夫することで、目的にあった結果が導きだすプロセスは大変重要です。今回のシンポジウムは本学会としては初の試みである、公募で広く呼びかけました。シンポジウムの意図が伝わるようなポスターを企画者らで作成して第29回学術集会において呼びかけをしました。結果、公募によるシンポジウムを合わせて3名のシンポジ

ストと海外からのゲストシンポジストからの合計4つの研究発表をもとに、議論を進めることになりました。

3名の日本の研究者（植木慎悟氏 佐藤伊織氏 山本弘江氏）は、それぞれの関心領域が異なります。いずれも家族員の二者からデータをとるところは同じですが、子どもの疾患の受けとめについて両親から、あるいは、子どもの疾患の影響について子ども自身と親から、さらには妻のメンタルヘルスの状況を妻自身とパートナーから、評価するといった試みです。海外からのゲストシンポジストのEdward Chan先生は、専門が社会学です。家族の中で起こる暴力を研究課題にしています。報告者によって内容が異なることを経験しているため、真の姿を現す信頼できるデータ元は誰かというところも議論になります。

このようなDyadic approachによる研究は、家族の理解を立体的にし、結果として、家族の中の複数員にアプローチする家族看護学の実践に活かせるのではないかと考えます。研究においては収集できるデータには関係性の良い二者からのデータというバイアスの可能性もありますが、今とは違う将来を予測できるデータにもなりうるという解釈も可能です。家族同士がその事象の受けとめ方の違いに気づき、本来の機能を取り戻すためにDyadic approachの研究成果をフィードバックすることも必要なのではないでしょうか。家族の役割の再構築にも活かせるのではと企画者は考えております。